

城山城について

義 則 敏 彦

はじめに

城山城（きのやまじょう）は、兵庫県たつの市の新宮町馬立・下野田と揖西町中垣内にまたがる標高四五メートルの亀山（きのやま）の山上に築かれた山城である。古代山城と中世山城が同じ場所に位置し、山岳寺院もあつた可能性があり、その様相はかなり複雑である。

一、古代城山城

六六三年、白村江の戦いで日本と百済の連合軍は唐と新羅の連合軍に大敗する。このため、日本では百済からの亡命者の指導の下、九州北部と瀬戸内沿岸部に古代山城を築城する。今のところ、文献に登場する古代山城が十一カ所、文献に登場

しない古代山城が十六カ所あり、合計二十七カ所の古代山城がある。瀬戸内沿岸部には旧国単位に一つないし二つの古代山城が築かれ、九州北部には集中的に古代山城が築かれた。城山城は文献に登場しない古代山城であるが、おそらくこの頃に築かれた古代山城と思われる。その後、古代山城の多くは八〜九世紀に廃城となるので、城山城もこの頃に廃城になったと思われる。ただ、『峯相記』（一四世紀に成立）には、天徳年中（九五七〜九六一）に盗賊が亀山に城を築いたという伝承を記載しており、興味深い。

古代城山城の廃城後であるが、平安〜鎌倉時代の遺物と共に仏鉢形須恵器が城山城で採集されていることや城内の地名に「観音屋敷」や「サンマイ谷」などの地名があることなどから、山岳寺院が築造されたのではないかと推測する。一四世紀の赤松氏による城山城築城に関する史料には本堂



門の築石

の記述があつたり、今も城内には板碑（南北朝）室町時代初期）があることから、赤松氏が築いた城山城には仏堂などが存続していたのではないかと考える。

城山城の古代山城の遺構は、列石・

夾築土塁・内托土塁・門の築石（つきいし）・石塁などが見つかっている。

列石は土塁の根元に石を置いたものである。夾築土塁は断面台形の土塁で、内托土塁は斜面をL字形に整形した土塁である。門の築石は城門の礎石で、凹字形の石材（二個）と段差をもつ石材（二個）が見つかっている。凹字形の石材には、掘立柱を建てる方形の掘り込みがあり、その内側に方立の柱を設置する小さい方形の穴、そして中央に扉板の開閉を止める低い段差がある。これら

の石材を組み合わせると城門の幅が約二・七メートルであったことが分かる。なお、門の築石とまったく同じ形の礎石が山口県の古代山城である石城山城にあり、沓石と呼ばれる。

他にも類似の凹字形の礎石が瀬戸内の古代山城である讃岐城山城（香川県）と鬼ノ城（岡山県）で見つかっているが、九州の古代山城では凹字形の礎石は見つかっていない。

次に石塁であるが、城山城では北石塁、西石塁、南石塁が見



西石塁

つがっている。このうち西石塁は全長が約四〇メートル、高さが約三メートルあり、城山城では最大の石塁である。

城山城で採集された古代の遺物は、須恵器・土師器・緑釉陶器などがある。須恵器の中には、蓋の内面を硯に転用した転用硯も含まれる。また、緑釉陶器は、たつの市内でも滅多に出土しない珍しいものである。

二、中世城山城

中世城山城を築いた赤松則祐は、上郡町に白旗城を築いた赤松則村（円心）の三男である。築城に関する記事は、相生市の矢野荘に関する史料（東寺百合文書・教王護国寺文書）の中に数多く見られる。

赤松氏による城山城の築城は南北朝動乱の只中の文和元年（一一三二）頃から始まる。城山城築城の人夫を徴発する守護の使者が矢野荘に初めて来たのが文和元年である。その後、度々人夫を徴発する命令が矢野荘に来たようである。康安元年

（一二三六）には城山城に兵糧や塩を運ぶ人夫が徴発され、貞治元年（一一三六）には城山城の倉と本堂、越部守護館を築造する人夫、城山城に材木・具足・兵糧を運ぶ人夫、越部守護館に白土を運ぶ人夫が徴発される。その後も白土を運ぶ人夫が何度も徴発されており、かなり立派な守護館を造っていたと思われる。応安三年（一一三七）には守護館へ馬の飼料を運ぶ人夫も徴発されている。永和二年（一一三七）には本堂の地ならしの人夫が徴発されており、本堂も立派な規模のものだったと思われる。なお、城山城と守護館の倉を築造する人夫が最後に徴発されたのは明德元年（一一三九）のことである。

本堂については貞治元年（一一三六）から永和二年（一一三七）の築造記事があり、十四年以上の歳月をかけて築造されたことがうかがえる。また守護館については貞治元年（一一三六）から明德元年（一一三九）の築造記事があり、二十八年以上の歳月をかけて築造されたことが分かる。城山城の築造に関する記事は、文和元年（一一三二）から明德元年（一一三九）までのものがあり、約

四十年間という長い期間をかけて築城にあたっていたことがうかがえる。なお、越部守護館については残念ながら場所が不明で、大手前大学が城山城東麓の馬立地区を発掘調査したが明確な遺構は見つからなかった。

嘉吉元年（一四四一）六月二十四日、赤松満祐は六代將軍足利義教を京の自邸に招き暗殺する。

その後、赤松氏は坂本城（姫路市）を拠点に播磨各地で幕府の追討軍と戦うが、形勢が不利となり、九月二日には坂本城を放棄し、城山城へ籠城する。そして九月九日、追討軍が城山城を取り囲んで攻撃を開始し、九月十日に城山城は落城し満祐は自害する。それから約百年後の天文六年（一五三七）、尼子晴久が出雲より播磨に侵攻し、天文七年九月に城山城に陣を置くが、本国を大内氏に攻められため天文九年に播磨から撤退する。これ以降、城山城が使用された記録はない。

城山城の中世山城に関する遺構としては、郭・堀切・横堀・石垣・井戸・庭園・土塁・礎石建物跡などが見つかっている。

郭は、城内南部の南斜面に数多く残っている。



西堀切

堀切は、城内の北・西・南の尾根上に残っており、西堀切は尾根の岩盤を四、五メートルの深さまでV字状に掘削した城内最大の堀切である。横堀は山頂北側斜面にL字状に設置された堀で、非常に長大な規模の堀である。堀内に仕切りのような

堤が三か所あり、類似の遺構は篠ノ丸城（宍粟市）で見つかっている。石垣は主郭である赤松屋敷の南東隅に小ぶりな石を積んだものが残っている。井戸は、赤松屋敷の北西隅に石囲みのものがあり、現在も水が湧いている。ここから水が南流しており、庭園の可能性がある。土塁は、礎石建物跡の背後の山上に大規模なものが残っている。礎石建物跡は、五×七間の総柱建物の遺構が残っており、建物正面の斜面には急な石段があったことが最近判明し、築城の記事に記載がある本堂がこの建物



礎石建物跡

ではないかと推測する。

城山城の縄張図をよく見ると、赤松氏は古代山城の遺構や山岳寺院を活用し要所所に手を加えて中世山城を築いていったことがうかがえる。

城山城で採取された中世の遺物としては、青磁・白磁・天目茶碗・備前焼・丹波焼・古瀬戸・染付・

瓦質土器・土師器・茶臼・砥石・炭化米・壁土・鉄釘・銅製品などがある。このうち、青磁、白磁、天目茶碗は中国から輸入された高級品ばかりである。なお、染付は1点だけ見つかっており、尼子氏が在城した16世紀頃のものである。

三、城山城の課題と活用

城山城は、今だ発掘調査が行われていないことから、不明な事が数多くあり、課題も多々あるもので、主なものを列挙してみる。

・城山城は、古代山城・中世山城・山岳寺院が混在しているので、今後発掘調査等を行い、各遺構の性格を明確にしていかなければならない。

・城山城は、文化庁より国指定史跡候補物件の内示を以前にいただいているので、早急に史跡指定を行い、国・県・市で連携しながら、調査・研究・保存・整備・活用等に今後取り組んでいかなければならない。特に県下最古の城郭の石積みである西石塁が崩壊の危機に直面しているので、一刻も早い対応が望まれる。

次に活用であるが、城山城は兵庫県下で唯一の古代山城であり、ここ城山城が「兵庫県のお城の発祥の地」ということになる。また中世山城としての城山城は、矢野荘関連の史料から築城の過程がわかる全国的に例のない中世山城である。それ

から、当時の公家や皇族の日記である『建内記』や『看聞日記』には、嘉吉の乱について詳細に記されており、築城の記録だけでなく落城の記録まで残っている貴重な中世城郭でもある。

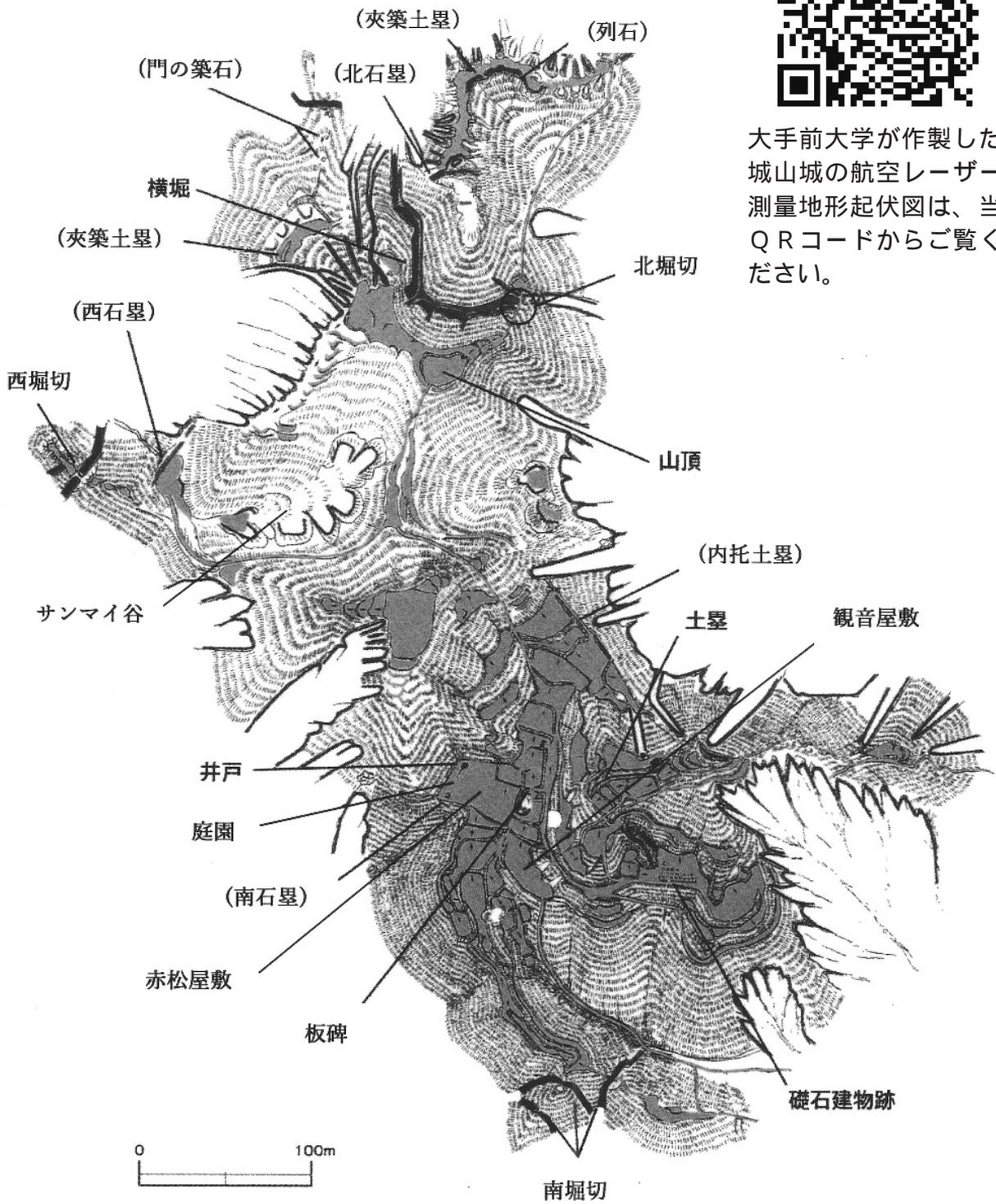
このような山城を活用していくため、兵庫県では、西播磨県民局が「西播磨山城復活プロジェクト」を企画し、城山城については、地元の越部地区の住民が参加し展望場所の整備や案内標識の設置など大きな成果を挙げている。今後も、このような活動が継続し、多くの方々に訪れていただける山城となることを期待している。

主な参考文献

- (1) 『城山城』(新宮町教育委員会 一九八八)
- (2) 『播磨 新宮町史 文化財編』(たつの市 二〇〇五)
- (3) 『再現 播磨の中世城郭 描かれた中世山城の世界』(たつの市立埋蔵文化財センター 二〇〇七)
- (4) 『西播磨の戦国時代 赤松氏の興亡』(たつの市立埋蔵文化財センター 二〇一一)
- (5) 『中世播磨250の山城』(木内内則 二〇一八)
- (6) 『城山城 古代山城と赤松の城』(たつの市立埋蔵文化財センター 二〇二二)



大手前大学が作製した城山城の航空レーザー測量地形起伏図は、当QRコードからご覧ください。



城山城縄張図 木内内則作

(): 古代山城の遺構